

1 土佐日記

1 『土佐日記』について

ジャンル 日記文学

記録としての漢文日記とは違った、文学としての仮名日記の草分け

成立 平安時代

作者 紀貫之きのつらゆき（生年不明〜九四五年か？）

『古今和歌集』の撰者
『古今和歌集仮名序』を執筆

内容 旅日記

○任地である土佐から京へ帰るまでの五十五日間のことを記している。「日次（毎日）の日記」で、一日も記事の省略はない。

○船中の人々の言動・人情の厚薄・自然の景観・亡児への追慕・京を待望する心情・帰京の感想等が諧謔かいぎやくに富んだ表現で書かれている。

特徴 ○最初の仮名日記

○紀貫之が自らを女性に仮託かたくして記している。

関連する重要事項

日記文学の流れ

〈平安時代〉

土佐日記（紀貫之）

蜻蛉日記（藤原道綱母）

和泉式部日記

紫式部日記

更級日記（菅原孝標女）

讃岐典侍日記（藤原長子）

〈鎌倉時代〉

十六夜日記（阿仏尼）

2 序・門出(承平四年十二月二十一日)

男をこもすサ変・終①なる伝・体日記にきといふハ四・体ものを、女をむなもしてサ変・用みマ上・末んとて意・終するサ変・体②なり断・終。それ
 の年としのしはすの二十日はつかあまりひとひ一日の日
 の戌いぬの時ときに、門出かどですサ変・終。その由よし、
 いささか形動・用にものカ下二・終に書きつく。
 ある人あがた、③県あがたの四年よとせ五年いっとせはてタ下二・用て、例の
 ことどもみなしサ変・用をへハ下二・用て、④解由げゆなどラ四・用とり
 て、住むマ四・体館たちより出でタ下二・用て、船ふねにラ四・体のる推・体べき
 ところへわたるラ四・終。かれこれ、知るラ四・体知らぬ消・体、送
 りすサ変・終。⑤年としごろ形ク・用よくバ下二・用くらべ完・体つる係助・係人々なむ、
 わかれがたく形ク・用思ひハ四・用て、日ひしきりに副とかくサ変・用し

つつ、
 のラ四・体のしるカ下二・用うちに完・終夜よふけぬ。

通釈

男もするものだと思われている日記というものを、女であるわたしもしてみようと思つてするのである。ある年の十二月の二十一日の日の午後八時ごろに、旅立つ。その様子を、少しばかりものに書きつける。ある人が、地方官勤務の四、五年の任期が終わつて、習慣である(引き継ぎなどの)ことをみなし終えて、離任の証明などを受け取つて、(今まで)住んでいた官舎から出て、船に乗るはずの場所に移動する。あの人この人、知っている人知らない人(など、さまざまな人々)が見送りをする。数年来、親しく付き合ってきた人々は、別れるのをつらく思つて、一日中あれこれと(世話などを)しては、大騒ぎをしているうちに夜が更けてしまった。

語句

- ①(す)なる 伝聞・推定の「なり」。終止形に接続する。
- ②(する)なり 断定の「なり」。連体形に接続する。
- ③県 地方官勤務。
- ④解由 国司などの任期が終わつて、前任者から後任者に事務手続きなどの引き継ぎが完了した際に、前任者の仕事内容について、異常や怠慢がないことを証明する書状。前任者に渡される。
- ⑤年ごろ 数年来。「日ごろ」は、数日来。

3 馬のはなむけ(十二月二十二日~二十四日)

廿二日 はつかあまりふつか に、 いづみ 和泉の国までと、 形動・用 たひらかに ぐわん 願

立つ。 夕下二・終 藤原のときざね、 ふちはら 船路 断・已 なれど、 むま 馬のは

なむけ サ変・終 す。 かみ 上中下、 ゑハ四・用 酔ひ カ四・用 あきて、 副 いと

あやしく、 形シク・用 ① 潮海 しほうみ のほとりにて、 ラ下二・用 ② あざれ ハ四・已 あへり。 存・終

廿三日。 はつかあまりみか 八木のやすのり やぎ と ハ四・体 いふ人 ラ変・終 あり。 こ

の人、 ハ四・用 国にかならずしも ハ四・用 ③ 言ひ ハ四・体 使ふ ハ四・体 もの

にも 断・用 あら ラ変・未 ぎ 消・体(撥便) なり。 推定・終 これ 係助(係) ぞ、 形シク・体 ④ たたはしき

やう 断・用 にて、 むま 馬のはなむけ サ変・用 し 完・体(結) たる。 かみ 守

から 断・用 に 係助(係) や ラ変・未 あら 推・体(結) ん、 くにひと ⑤ 国人の心のつ

ねとして、 ヤ下二・未 「いまは。」とて 消・体(撥便) 見え ぎ

なる 推定・体 を、 ラ変・体 心あるものは ダ上二・未 恥ぢ 消・用 ず 係助(係) に なん

カ変・用 来 過・体(結) ける。 これは、 ハ四・用 ものによりて ハマ下二・体 褒むる 断・用 に し も ラ変・未 あら 消・終 ず。

廿四日。 はつかあまりよか ⑥ 講師、 むま 馬のはなむけ サ変・用 し ダ下二・用 に 出で

ませり。 尊サ四・已 あり ラ変・終 と ラ変・体 ある かみ 上下、 わらは 童 まで

酔ひしれ ラ下二・用 て いちもんじ 一文字 ラ四・未 を 消・体 だに 知らぬ もの し

が、 じふもんじ 足は マ四・用 十文字 係助(係) に あそぶ ふみて ハ四・体(結) ぞ。

通釈

二十二日に、和泉の国まで(無事に行けるように)と、心静かに願かけをする。藤原のときざねが、(この旅は)船旅(で馬を使わない)のであるが、馬のはなむけ(=送別の宴)をする。身分の高い者も、中ほどの者も、低い者も、すっかり酔って、とても見苦しく(物が腐らないはずの)塩水の海のそばで、(腐ったように)だらしく(く)ふざけ合っている。

二十三日。八木のやすのりという人がいる。この人は、国司の役所で必ずしも召し使っている(深い間柄の)者でもないようだ。(でも)この人は、おごそかな様子で、送別の宴をした。国司の人柄によるのであろうか、地元の人的心情の常としては、「(国司は)帰京してしまふのだから)今は(もう用はない)。」と、思っで見送りに姿を現さないようであるのに、(このやすのりのように)真心のある人は

(他人の考えなど) 気にかけてずいやって来た。これは、よい餞別の品をもらったから褒めているわけではない。

二十四日。国分寺の住職が、送別の宴をしてお出でになった。そこにいた身分の高い者も低い者も、子どもまでが正体もなく酔っ払って、一という文字さえ知らないような(無学の)者が、足では十の文字を踏んで(≡千鳥足で)遊んでいる。

語句

① 潮海 普通の海のこと。淡海・湖の対語で、水が塩分を含んでい
ることを示している。

② あざれ 「あざる」は、a 「あさる」で腐るの意。b 「あさる」でふ
ざけるの意。ここでは両義を活かし、「防腐効果のある塩水の海
のほとりにいるにもかかわらず、腐ったようにだらしなくふざ
けあっている」と洒落ている。

③ 言ひ使ふ 召し使う。

④ たたはしき 立派な。おごそかな。

⑤ 国人 土着の人。

⑥ 講師 僧侶の職名。諸国にある国分寺に置かれた職。